

AMCoR

Asahikawa Medical College Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録 () 平成18年度:60-61.

小児ストーマ装具の検討

日野岡, 蘭子

小児ストーマ装具の検討

看護部 日野岡蘭子

はじめに

当院では、小児ストーマ造設件数が年間平均すると約3～4件である。近年ヒルシュスプルング氏病の一期手術など、ストーマ造設件数は減少傾向にあるが、一時的ストーマが圧倒的多数を占める中で、装具についての客観的な評価がほとんどなされていないことから、装具選択について常に疑問を感じていた。表1は、小児のテキストや文献を参考にまとめた当院の選択基準であり、これらに則って選択している。

表1

体重 1000g 以下	カラヤヘッシブまたはカラヤシート *ただし在胎 25 週以上もしくは修正週数 31 週以上の場合は、必ずしもカラヤ使用とは限らない
1000～1500g	未熟児用パウチ(ホリスター) 新生児用パウチ(ホリスター)
1500g 以上 (状況に応じて)	アシュラキッズ1 アシュラキッズイーザーフレックス 17 cm、 同 27 cm バリエア小児用ワンピース

使用状況を示す

写真1はアシュラキッズイーザーフレックス 17 cm のものであるが、シールを装着するプレートが鼠径にあたり、使用を断念した。このタイプの装具は、上腹部の



写真1

下腹部が狭いため、プレートが鼠径部にあって発赤を生じた。



写真2

ストーマ造設でないと使用が困難である。極小未熟児(写真2)については、文献から在胎週数 25 週または修正週数 31 週以上であれば、合成系の保護材であってもスキントラブルは少ないと判断した。

両親の反応としては、さまざまな意見があったが、代表的なものを表2に示した。ベルトに関しては、現在1社のみがベルトのタブ付きの単品系装具を販売しているが、新生児期には不要であり、乳児期においても寝返りやハイハイなどで危険になるのではという意見があった。価格が高いという意見はなかったが、閉鎖後不要になっ

表2

両親	<ul style="list-style-type: none"> ・フィルターから便が滲みて服や下着を汚す、臭いが気になる ・裏打ちのメッシュが乾きにくく皮膚が赤くなる、あせもができる ・ばら売りしていないのが困る。何故返品できないのか ・ベルトのタブは不要、また赤ちゃんには危険では? ・途中で装具変更をしたが、遠いので見てもらえなくて困った
医療者	<ul style="list-style-type: none"> ・発汗の多い乳児への使用は、粘着力と保護材溶解の早さのバランスがとりにくく、適切な交換時期の判断がしにくい ・回腸、空腸などのストーマで水様便が多量に排泄されるときはフィルターをふさいでも滲みできてしまうため選択の幅が非常に狭まる ・厚みのある硬い保護材の場合は、腹部が狭い乳児の場合、保護材の外縁で皮膚を損傷することがあるため、テーパーエッジが望ましい ・閉鎖時期が予測できるのであれば、途中で装具変更は極力避けたい

たときに、返品できることが望ましいと言う考えを持つ人が多かった。当方の予測に反して、価格に関する不満がなかったのは、どの親もこの子のために必要なものは買う、という親としての思いが背景としてあると考える。両親の意見は、育児に密着したものであり、保護材や皮膚に関することは医療者に任せ、危険防止を優先していることが伺える。

閉鎖時までには装具の変更を行った例は、今回調査の対象とした6例のうち4例。脱出によるサイズ変化は1例で予測不可能であった。体重増加による腹部状況の変化は、造設時1840g、閉鎖時2380g、急激な体重増加によりストーマ周囲に窪みが生じたため、変更した。肛門側腸管の処置は、通常入院中に行うことであり、また長期間継続される処置ではないが、実際は処置の度に装具を除去することから剥離刺激が強くなる、それが容易にスキントラブルへ結びつく可能性を考慮し、最終的に二品系装具へ変更した。

考察

実際に装具を使用して、両親と医療者では見ている方向は異なるものの児への安全性やQOL、また快適性について共通の認識を持っていることがわかった。医療者が考える良い装具の条件はスライドに示したとおりであるが、医療者側、両親双方において重要であると考えられる。

本来、成長発達により腹部状況を含めて変化の著しい小児では、この条件に合わせてその時々で適切な装具を使用することが望ましい。しかし、途中での変更が負担になっている現実があり、何を優先し、何を妥協するかが問われてくると考える。

今回装具変更をしたケースにおいて、予測不可能であった脱出の1例を除いて、すべてその後の状況が予測できるものである。体重増加の度合いや腹部状況の変化など閉鎖時まで使用できるであろう装具を造設時から使用できるかどうかを考慮することも、特に遠方の患児では、受診間隔が長くなりがちであるため必要であると考えられる。

まとめ

- ・一時的な小児ストーマ造設における装具選択について考察した
- ・変化の著しい小児においては、造設時における従来の選択基準は、閉鎖時においても適切であるとは限らない
- ・装具の選択にあたっては、児の何を優先するかという条件を明確にする
- ・造設当初から閉鎖時の状況をできる限り予測し、可能な範囲で変更しないことを前提に選択することが両親の負担軽減につながる